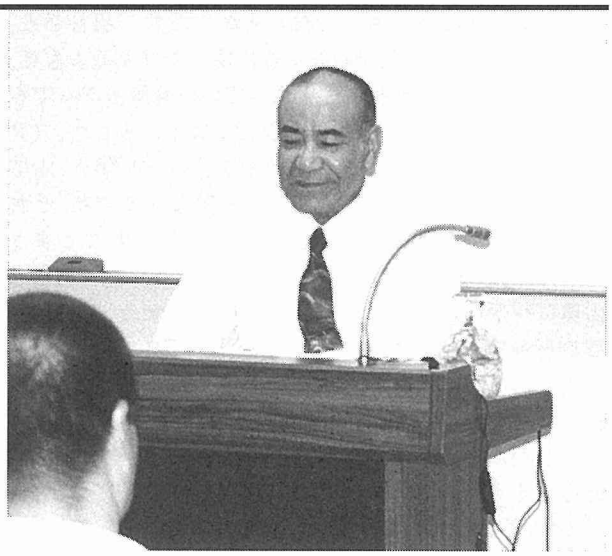
札幌会場

十勝アイヌの歴史を伝えて

8月3日(金)　14：00～15：30

講　師
帯広市アイヌ教育相談員
笹村　一郎



皆さんこんにちは。今紹介いただきましたが、私の生い立ちから話したいと思います。私は1929(昭和4)年、帯広のフシココタンというところで生まれました。本当はフシコベツというんですが、フシコという言葉は「古い」という言葉。ベツというのは「川」なんです。古い川の跡ということでフシコベツコタンといったわけです。そこは今もありますが、帯広市の郊外で、もうすっかり住宅街になっています。私の父親は和人で、お寺の坊主です。母親は純粋なアイヌです。そして私は7男2女の長男として生まれてきました。それで、なぜ私はアイヌの問題について関わっているかというと、私達アイヌ自身が自分たちのことをわからないわけですから、何とか私の元気なうちに、せめて帯広周辺の歴史だけでもアイヌ自身に伝えたいと思ってやっております。そういうようなことで、今日は皆さんもご存じのことばかり申し上げるのかもしれないですが、我慢して聞いてください。

先に、十勝のアイヌの人口をちょっとご紹介したいと思います。1999(平成11)年、北海道内に住むアイヌの実態調査が行われました。その時の調査では、道内に住むアイヌは23,767名となっています。けれど、この数字というのはあくまでも、私はアイヌですよと手をあげた人の話。ところが、私もいわゆる混血ですが、私の場合、女房は和人です。私の娘達は、父親はアイヌだという自覚はあるでしょうが、自分のことはどうなのでしょう。孫達になると、「爺ちゃんアイヌって何？」と聞くんですよね。それでも私は、私達家族はみんなアイヌだと言っております。私のような状況にある人達の半分以上はアイヌだと言わないんですよ。それで、私達にも本当の実態というのはわからない。1999年の調査では、十勝管内は998人となっています。これは、全道に住んでいるアイヌだと言われた方との比率をみると4.2%。だから十勝は非常にアイヌの住んでいる数が少ないんですよね。

十勝というところは北海道の開拓の歴史の中で一番遅いところなんです。昨年私は、松前へ調査に行ってきました。松前というと明治以前、松前の城下町があり、もう3万5千の人がいた。それくらいこちらの方は開発が早かった。それで、十勝に最初に和人として足を踏み入れた方は、近藤重蔵。この方が1798(寛政10)年に蝦夷地の巡見をしに国後、択捉をまわって、帰り道に十勝に入った。これが最初だといわれています。1800(寛政12)年には、皆川周太夫が十勝川の河口の大津というところへやってきた。今じゃ寒村ですが、十勝の開発の始まりには人口がもっとあったところです。それから十勝川のずっと上流をたどって、帯広で上陸した。そして帯広には水光園というところがあるんですが、皆川が帯広の東に上陸したという記念ポールが建てられてあります。

皆川が十勝川の水上調査をした後、1858(安政5)年、松浦武四郎が石狩川をさかのぼって、北海道の中央山脈といわれています大雪山渓、日高山脈を越して十勝川の源流に入った。それからその年、源流から十勝川の河口まで下がって一旦南下し、今度は大樹の方に向います。十勝川と別の川になりますが、それをさかのぼってまた十勝川にでてきている。そういう調査資料は私達にとって一番大事な資料です。私は十勝生まれですから、資料をみても、それからその足跡を訪ねて歩いてみても、ああ立派な仕事だなと思って、今でも私の参考資料としては一番大切な資料です。

松浦武四郎の後、十勝に和人が入ってくるのがいつ頃かは、ほとんどわからない。幕府の調査以外に、一般の和人がいつ十勝に足を踏み入れたのかということは、歴史を紐解いてみてもわからないようです。十勝のことは、松前の時代でも幕政の時代でも東蝦夷地と呼ばれた。そして人跡未踏地とも言われた。明治の4、5年頃になると、屯田制度や何かを使いまして、道央、道南、道北の方へ、どんどん開拓の鍬が入れられた。そうして道央、道南、道北にどんどん人が入ってきて開発するもんですから、今度は鹿が日高山脈を越して十勝の方へ一斉に流れ込んできたわけです。それで鹿の皮目当てに明治の10年頃から、本州から猟師とか商人達が先を競って十勝へ来たんです。当時鹿の皮というのは、ヨーロッパあたりへ輸出されたも

のなんですね。それから鹿角も目当てにされました。この鹿角は中国へ漢方薬として輸出されていた物なんです。そういうことで、明治の10年頃からどんどん和人が入ってきたんです。

定着した人の一人に大川宇八郎という人がいます。この人は日高山脈を越えて、行商として十勝入りをしている。この人は縫い糸だとか縫い針だとか、アイヌにとって貴重品となる物を背負って十勝に入ったんですね。もちろんアイヌだけでなく、鹿猟に入った人達とも商いをするために入ったんです。この人は帯広の東のオベリベリという札内川の川岸の方に入って、アイヌの女性と結婚しているんです。それで、明治の15年頃か、16年頃かな、十勝の内陸に牧場や畑などをして手広く農場を始めたという歴史が残ってるんですが、この方の子孫は現在も住んでおられます。

年代はさかのぼりますが、十勝に入った和人の歴史としては、松前藩の記録で、1635年に砂金が発見されているんです。だから、最初に松前藩が十勝の内陸に入った目的は砂金採りだったようです。歴舟川には今でも砂金が若干採れ、大樹町が毎年、砂金掘りの体験ツアーなどのいろんなイベントをやっていますよ。私も昨年、その歴舟川の源流までさかのぼったんですが、その時には結構やってました。年輩の方が多いんですね。定年退職してから、楽しみにやってるという方がね。10年やってるんだけども、もう300グラム位採ったと言ってました。今、金の単価は安いですから300グラムは大した金額ではないはずです。一日やったって、10粒とか20粒ですから。

明治15年に鈴木銃太郎という人と依田勉三が十勝に開拓しようと思って最初に入ってきたんです。明治の頃は十勝は鹿ブームでわいた時期なんですが、明治12年に大雪が降り、鹿の大半が餓死した。そしてその後も、明治15年にまた大雪が降った。池田町の利別川というところには、鹿の死骸がごろごろと川の中に重なり合って悪臭を放ち、その川の水を飲むことができなかったという記録が残されています。私は、利別川の源流から川下りをしに先週の日曜日に大津まで船で下がってきたばかりです。天気が良くなったら今度はセスナを頼んで、空から利別川の源流まで見てみようと思ってるんですけどね。そんなことで、2回目の大雪で鹿もほとんど捕れなくなって、本州から入った何百人という猟師の人達が、アイヌ達を使って鹿狩りをやっている。けれども、その鹿ブームが一旦去ってしまうと、潮の引くように本州から来られた方たちがみんな本州へ引き上げていった。

そんな頃、この依田勉三が開拓地を求めて明治15年に十勝入りをしたんです。それで大津の河口から、浦幌川だとか利別川だとかいろんな支流があるんですが、それを全部さかのぼって、開墾の適地を求めて歩いた。それで最後に帯広に来た。札内川と十勝川が合流する地点から2キロほど上流にオベリベリ、今の帯広が開拓の適地だと確信した。その時に鈴木銃太郎を一人残して依田は静岡へ帰った。依田はもともと殿様の家系なんですが、静岡に帰って開拓団を募集する。一人残していった鈴木は、十勝の冬とはどういうものか体験してみた。開拓団連れて依田が来るまでに住むところの支度をしようということで残ったわけです。それで、その後なんですが、この人もアイヌの女性と結婚してるんです。その頃のオベリベリの首長であった人の娘と結婚して、その末裔は今でもフシココタンにおります。私はその鈴木をよくは存じないけれども、私の母親だとか祖父達とかは親交のあった方だと聞いています。

そういうことで、帯広市では、明治16年に依田の開拓団が入った年を開基の年と定めたわけなんです。それで19年前には開基百年祭をやり、来年が120年になるので、来年は120年祭として帯広市の主催でイベントをやることになっています。

同じ明治16年頃、札幌のある道央地区はどうだったかというと、国有鉄道が通っています。手宮から小樽を通って札幌まで鉄道が開通したのが、明治13年11月28日。道央の方はそれくらい開拓も進んで、そして便もよくなった。だけど十勝の方は遅れていた。十勝に開拓に入るとしたら、まず大津の河口までいく。大津の河口から帯広までは、陸路で50キロくらいです。だけど、川で上がるとくねくねくねくね曲がって倍もあるんですよ。今でこそ河川改修をしたりして直線にしてるから距離は相当近いけども。その頃開拓に入る人達は、アイヌの丸木船で行きましたよね。足の強い人は陸路をたどっただろうけれど、足の弱い人だとか荷物がありますよね。そういうのは全てアイヌが丸木船で帯広まで運んだものなんです。それ以前に、松浦武四郎が十勝の調査に入った時は、乗った船が一回ひっくり返って、武四郎の書いた日記帳をそこで無くしたりしてるんです。その頃は原始のままの河川ですから川の中には流木が横たわっていたり、急流があったり、非常に危険度が高かったらしいのです。

それでも鹿狩りに入った人達の中には、十勝のよいところに目を付けて、ここを新天地として開拓してここに住んでみようかという人もでてきて、入植がはじまった。十勝の植民地解放というのは明治29年だったんですが、その時に660人の入植者がおられる。それで問題になってきたのは、アイヌ達なんです。どんどん解放される以前でも和人が入ってくる。明治18年の時点で、道央・道南地区はもう開拓の余地、受け入れる余地が無くなってきた。この北海道開拓というのは国策でやってましたからね。それでそこにはもう入植する場所がない。手つかずで残っているのは十勝だということで、明治18年から区画割りされる。まあ図面の上ではです。その頃十勝のアイヌは1,660人といわれていた。そして平坦な地域の海岸縁だとか、十勝川や札内川の川沿いといったところに散在していた。それで、ここへ開拓民をこのまま入れたのでは、開拓民と上手くいかないだろうと危惧された。

北海道へ早く入ってアイヌの教育もやった人で、バチェラー博士という牧師さんがいますよね。この方が開拓使に進言した。アメリカでは西部開拓史上において、開拓民と地域のインディアンとの衝突が絶えなかった。それでインディアンには共有地を作って、居住地に閉じこめた。その居住地にいる間はインディアンの安全を保証しますよ、ただ

し居住地から出た場合は安全は保証しませんよという条約です。そこまでは日本もやらなかったんですが、アイヌを和人化しようとした。アイヌは狩猟採集で暮らしてる人間だから、開拓が始まるとそういう狩猟採集の生活はできなくなる。それでアイヌ達に農耕を教えようということが明治18年から始まったんです。それと同時に開拓民を受け入れるための区画整理を始めているわけです。

アイヌ達には農業を教えるといって、コタン(村)に半強制的に移住させた。例えば、新得から周辺にいた人達はみんな芽室まで下がれということで、毛根というところにアイヌコタンを作った。それから数キロ下がったところにも芽室コタンというやつを作れと。それからずっと下がってきて、私の生まれたというフシココタンに、明治18年に半強制的に移住させられたのは私の祖父達です。そこで農業を教えるからといって始まったんですが、農業をそれまでしたことのない人達に教えるのは非常に難しかった。明治18年というとまだ和人も依田勉三と、あとに入った人が数名いるくらいですからね。まだまだ奥地に入れば狩猟もできるし、鮭も捕れるという望みがアイヌにあった。

ところが明治16年、十勝川などの大きな川では、鮭の捕獲を禁止した。川で鮭を捕ると産卵することができなくなるという理由でね。捕獲禁止令というものが出されているはずです。オベリベリにはその当時、依田勉三が入った頃、アイヌの世帯は10世帯あったそうです。名前も残っています。それで、その人達は鮭の捕獲禁止令なんて知らないわけです。だいたいその当時は、日本語がわかるアイヌはほとんどいないわけです。鮭の捕獲禁止令が十勝でも施行されて、オベリベリに二人の密漁監視員が東北の方から雇われた。道庁で雇ったんですが、この人達二人が十勝川に配属された。十勝川の支流で帯広川というのがあるんです。帯広の街の中を流れている川なんです。それで、十勝川の内陸に住むアイヌ達にはここが鮭の捕獲場として最適で、一番そこにみんな集まっていた。

今ではしっかり川を掘って放水路にしてコンクリートで固めてある。私は昭和20年頃札幌に住んだんだけど、その頃の札幌の街は今とは全然違う。川を見ても、コンクリートで固まっちゃってる。帯広もそう。私の子供の頃はまだ原始河川だけれど、流れは緩やかな川で、川底はきれいな玉砂利と砂で、そして水深は平均6、70センチくらい。それが帯広市の中心街のちょっと上流まで続いていた。それで、鮭は、ほとんどがそこへ産卵に入った。私の子供の頃もそうだった。けれど、私の子供の頃は既に捕獲場があり、帯広川の河口から2キロぐらいのところに柵を建てて鮭の遡上を止めちゃっていた。入り口は広くて中を狭くした箱を作っていた。そういうことを昭和23年頃までやってました。もちろん明治の頃は鮭の捕獲場なんて帯広周辺にはない。大津の河口では和人の方たちが許可を取ってやっていましたけどね。

その明治16年は、冷害があったらしいんです。依田勉三達が入植して、いろいろな作物を試作したんだけども、収量はほとんど上がってない。秋が非常に早く来たらしい。ところで、帯広から十勝川一本はさんで対岸は、音更というんですけど、そこには20数戸のアイヌが住んでいた。それで、40戸近いアイヌ達が帯広川で河口から1、2キロ上流までを鮭の捕獲場にしていたわけね。もちろんその場合は、アイヌの漁具でどんどん捕れた。もちろん網も使ったらしい。単純な1キロくらいの長さの刺し網なんかでも捕ったらしいです。それで、その当時そうやって鮭の捕獲禁止令が出たということも知らないし、密漁監視員が配属されたことも知らなかった。10月の下旬になると遅かった秋味が、やっぱりどっと上ってきた。帯広川が狭いくらいに鮭が重なり合って上って来たというんです。それでその音更のアイヌ達もオベリベリのアイヌ達も両方の部落から鮭の遡上を監視する者をおくわけ。そして鮭が来たぞって部落に知らせる。そうすると部落の人達がそれぞれ漁具を持って河原へ集まるわけ。

その当時のアイヌの人達も鮭漁に入るときは、カムイノミといって神に豊漁と身の安全を祈願してから漁に入った。みんながより集まって、そして神への儀式も終わらせて、さあ川へ入るぞというときに、その騒ぎを聞きつけた密漁監視員が鉄砲を持って駆けつけた。当時、密漁監視員達には銃を持たせたわけ。それで「こらこらおまえ達は何をするんだ。鮭は国の規則で捕ってはダメなことになってるんだ。おまえ達捕ったらダメだ」といったんですが、その監視員の言葉を理解できるアイヌは、ごく限られてる。一人か二人。まあ、どうやら何をいってるか意味を解したらしく、監視員に「アイヌは昔から鮭漁で半年の命を繋いできた。それを、今から鮭を捕ってはダメだといわれたら、俺達も家族も餓死しなきゃならん。だから捕らしてもらう。鮭は神からの贈り物でアイヌに与えられた食料なんだ。それを捕って悪いという話があるか」と言った。そして堂々と川へ入ろうとした。そしたら阻止するのに弾を2発打ち込んだんですよ。

その前に、川へ入ったらぶち殺すと監視員は言った。そしたらその意味がわかったアイヌのうち、物を食わないで餓死するくらいなら、鉄砲でひと思いに殺された方がましだと日本語で答えたものもいたらしいんです。それでそのアイヌ達がこぞって川へ入ると、密漁監視員は言葉もなかなか通じないということで弾をぶっ放した。まあ、二人だから二丁の鉄砲から2発しかでないんだけど。ただその時に使った鉛玉というのは、散弾銃なんですよ。鹿打ちに使う玉でね。それを鷲や鷹が食って、鉛害で死んでいくから今はもう鉛玉は使わせませんよ。当時の鉛玉は小粒だね。普通鉛玉というのはパチンコ玉よりちょっと大きい28口径でね。だいたい鹿の散弾銃は薬莢一つに40発くらい入るかな。それをアイヌの群れの中にめがけてぶっ放した。そこで即死したのが4人、翌日になって死んだのが1人、その他ケガした人が多数。実際の数字はわからないんですけども。

そういうことがあって、その冬から春先にかけて、このオベリベリから音更にかけてのアイヌに餓死する人も出てきた。それで大津の依田勉三や鈴木銃太郎は、アイヌがこうやって餓死してるから救済して欲しと道庁へかけあい、アイヌの家一戸あたり米5升ずつの救援米が届いたと

いう記録が残ってます。

明治18年に保護コタンというものが作られて、そこをアイヌの居住区と定めてそこから動いてはならないと閉じこめられた。その当時に何軒あったか私達が調べてみてもわからない。明治32年に旧土人保護法というのができます。農耕を志すアイヌは5町歩、1万5千坪を限度として下付するという法律ができたのですが、実際に十勝でアイヌの人達に土地が寄付されたのは、明治38年です。その時にフシココタンで土地の給付を受けた方は55軒という数字が残っている。その時の名前も全部わかってます。だけど土地をもらえなかった人もいるわけ。それで、だいたい5町歩ずつ当たって、あと国有地として残すところもあった。これは、どういう地域にしたかというと、南は帯広の真ん中を流れている帯広川の南側から、北は十勝川、本流まで。この間がアイヌの居住区であり、また給与地が当たったところ。その当時は55区あたって、それからあたった人は一人もおりません。55区で終わり。

ただその頃、十勝川には堤防ができてなかったんですよ。入水工事に着手したのは明治の末期。その頃は河原に堤防なんか作らない。私が子供の頃で応急処置みたいなものがつくられ、2メーターくらいの高さがあったかな。昭和15、6年頃なると、トラック3台くらい並んで走るだけの広大な堤防を作っているんです。十勝大橋ができたのが昭和16年ですから、16年には十勝大橋のところまでその堤防がいってました。それまでは大変なところだった。そして、ダムができたからとは思うんですが、昔のような洪水って今は出なくなった。おそらく石狩川でもそうでしょう。私達の子供の頃は、長雨が何日も続くと、みんなその堤防に行って、逃げなきゃならないかと心配してみたものです。だけど今は、川に面した方はコンクリートブロックで固めている。何百年に一回っていう洪水を想定して作ったということで、ものすごい堤防ができている。おそらく、ダムでも決壊しない限り堤防いっぱいに水が流れることはないと思います。

アイヌ達には十勝川の川縁までが居住地だったものだから、そこにあたった人達はみんな数年で土地が流されちゃって、なんにも無くなった。河原になっちゃってね。そういう人達は再交付願っても、もらえなかった。ただ、これは帯広のフシココタンというところだけなんです。日高とか道南地区ではアイヌの人達は5町歩ずつもらっているんだけれども、帯広の場合は2町5反歩といわれた。大洪水が起きても水が氾濫しない周辺に2町5反歩ずつ区画割りしたということは、政府としてもその辺を考慮はしてたんですよね。今でこそ水害のおそれって無くなりましたけれども、昔は水があふれると、高台にみんな避難した。私達の頃は、そういうことはあんまりなかったけれども、もとはそうだったそうです。

日高であろうと道北であろうと、アイヌ達はみんな5町ずつもらい、保護コタンというの作らなかった。これは十勝だけです。テストケースとしてやったのか、最後だったからやったのか。開拓史は、当初は十勝管内のアイヌを5ヶ所くらいに集めて、そこに保護コタンを作ってアイヌを住まわせようとしたんですけれども、アイヌ達から抗議が出た。昔もやっぱり反論した人はいるんだね。アイヌというのは川縁から離れたがらないんですよ。もとは狩猟採集で暮らし、主な食料というのは鮭、あるいは鹿。明治18年というと一番貴重な食料は鮭です。だからいくら密漁監視員が来ようがどうしようが獲り続けていた。アイヌ達だって一回やられたら、監視のいる周辺はいかない。遠く離れてやる。とにかく監視員に見つからないようにやればいいんだと。監視員の方だっておっかない。道もろくに無い原始林の中を密漁の監視に歩くわけはないわけ。それで5ヶ所に集めると言ったんですが、アイヌ達はどうしても川岸から離れたがらない。

アイヌ達に5町ずつ土地を与えるのには、5ヶ所ではどうしてもダメだということで、最終的に十勝は、アイヌの居住地を12ヶ所作ったわけなんです。ただこの12のコタンからはずれて二つ三つはアイヌコタンがある。これは広尾管内です。ここの場合はそれから除外したらしくて、そこにもとから住んでたアイヌ達にその地域に土地を与えたということで、正式な保護コタンと称されるものは12ヶ所です。

それから、帯広にアイヌ学校ができた。これは、全道にできたものです。明治32年に旧土人保護法ができて、アイヌも国の政策に基づいて小学校4年間の義務教育を受けることになった。帯広には遅くて、明治の37年5月10日に庁立第二伏古(ふしこ)小学校ができている。伏古小学校というのは和人の学校。それから2キロほど離れたところに作ったのが、この第二伏古小学校で、大正年間に入ってから名称が変更されまして、日新小学校という名前が付けられた。十勝管内にアイヌを専門に受け入れたアイヌ学校は三つしかないんです。他の二つは音更の開進小学校というのと、毛根小学校。この三つがアイヌの教育を専門にやった学校です。

明治32年に旧土人法ができて、本格的に十勝管内の学校教育が始まったのは37年。そして38年になってから、十勝管内のアイヌ達の希望するものには5町歩ずつの土地が与えられている。すると、日本語をしゃべるのも大変な人ばかりだよね。その土地が当たった人達は若くて30代、あるいは50、60代のじいさん達だから、もちろん文字を書くなんてことは絶対できない。これがひどい。日高あたりだと、明治前からキリスト教の布教の一環でアイヌの教育をはじめている。まあ、帯広でも日曜学校というのはキリスト教会でやった歴史はあるんですが、それはこの小学校の始まる2、3年前のことで、ごく一部のアイヌが通ったらしい。特級階級にあったある程度金持ちの子供達がその日曜学校で学んだという歴史があった。

アイヌ学校の校長は結局二人しかいなかった。というのは昭和26年8月29日に閉校になっているから。初代校長は三野啓太郎という方。二代目の校長が、十勝では有名な方なんですが、吉田巌。アイヌの研究家としてもちょっとした大家です。十勝の歴史なんか調べるのには、この人の書かれた日誌なんかが非常に参考にさせていただいている。その方の遺稿などの資料は帯広の図書館にまだまだ山積みにされている。ところが、この先生の字はすこぶる上手い。昔の方なので走り書きされたら、ちょっと読め

ない。私の友達が今その校正などをやっているんだけれども、大変です。拡大鏡を使ってやっている。まあ、ある程度やっていくと癖がわかるとはいわれるけれど、あれは何年かかるかね。今やってる人は私より少し若い、今70歳くらいの方。市の嘱託職員でやっていて、5年やって5巻出したか。そしたら今年、市の方から一年に2巻出せとなったけど、とうていそれはできないと思います。この資料は本当に克明に書かれています。私達もちょっと憤慨するようなところもあるけれども、歴史というのはやっぱり真実を伝えなきゃならんと思ってる。だからちょっとカッと頭にくるようなところもあるけれど我慢して読んでいます。それと、校正委員はなるべくそういうことを除外するようですね。先ほど言った、アイヌをどうやって殺傷したかというようなこと。これは帯広市史であろうと十勝史誌であろうと、それから依田勉三の晩成社の日誌であろうと、一つも載ってないわけ。

私が小学校3年生くらいの時、昭和13、4年、やがて大東亜戦争と呼ばれる第2次世界大戦も始まろうというころの思い出があります。私達の育ったフシココタンは、昔は十勝川が氾濫すると、だーっと国道38号線のそばまで水が流れてきて、あちこちにその枝川を作って、そして水が引くとあちらこちらに沼が残ったりしていたんです。私が生まれた頃は、井戸も掘ってなかったし、ポンプもなかった。でも家の庭先に湧き水があった。ずーっと湧き水が流れ出てきているからフシコベツ川というのは冬でも凍らない。そして、よく鉄砲打ちの人たちが冬の夜明けからバーンバーンとカモ撃ちをやってました。十勝大橋から数百メートル上流側に、フシコベツ川が十勝川に注いでいる。秋味がだいたい1月いっぱいまで上ってきたところです。3月になると昔は堅い雪になる。3月の末頃、春休みの頃から新学期が始まる前に堅い雪になると子供達は弓型したすくい網を持って、フシコベツ川の河口まで行くんですよ。その河口からだんだんと上流へ向かって私の家の前まで魚をすくってくる。それでいろいろな魚が入るけれど、雑魚は一匹も捕らない。中からヤマベだけを選ぶ。ちょうど毎年同じくらいの分量だったけれど、だいたい一斗缶、20リッターくらいになる。私と一緒に行動した5、6人の仲間でそれらを分けてた。そういう豊かなコタンだった。

あるとき、フシコベツ川の川尻へ私のエカシが密漁に行くのに、「エカシ、連れてけー連れてけー」と私が言って、無理やりエカシについて行ったことがあります。そのフシコ川の河口は、川幅があの頃で7、8メートルくらいだけど、川口はがーっと深い。本流はゴーっと渦巻いて、そこも深い。フシコベツの川に産卵に入る鮭がその川口に来て網にかかるんだけど、そこへ網をさすのに、川向かいで網を引っ張らなければならない。それで、そこから上流へちょっと230メートル上ると子供でも膝かぶ程度なので、ズボンの裾をまくって向かい側に行った。まだ夕暮れ時だからそれほど恐ろしくなかったんだけど、エカシの投げてよこす網を取って、引っ張って網を川口にかけるわけ。そうしているうちに、秋の11月か、10月の末だったから、どんどん暗くなってきて、おっかない。河原はイタドリだとかそんなのがうっそうと茂っているから、夢中になってエカシのところへ走っていくわけだよね。そうして、かかったら「一郎、おまえ向こう行って網ほどけ」、と言われる。おっかないんだけど、行くって言って来たからしょうがないでしょ。向かい側にまわって網をほどくと、エカシが秋味をはずす。そしてまた私が引っ張って網をかける。そうしているうちに8時、9時になる。

その当時そのフシコベツ川の河口から2、300メートルも行ったところに鉄道があって、そこを終列車が8時ちょっと過ぎに通った。ガーってその鉄橋を渡っていく。だから今度は、かからなければいいなって私は思うわけ。かかったらまた迎えに行かなきゃならないからね。そうしているうちにエカシが、「来た！」と言う。何が来たんだろうと思って、エカシの指さす方を見たら、十勝大橋の下の方から懐中電灯がちらっちらっと見えてきている。完全に密漁監視員だとわかる。それで、今度はエカシに手を引っ張られて、そのフシコベツ川のイタドリの草わらの中に潜り込んだわけ。そしてそこで二人してうつぶせになって隠れていたら、やっぱり網のところに来て、そして話声が聞こえてくる。そうしているうちに、「こらぁ」と言われて、頭の上から突然電気を照らされた。そっと目をあげたら、二人いたのです。

私達が網をさしていたところの上流1キロの地点に、孵化場があるんです。孵化場というのは鮭を捕獲して採卵して、稚魚をつくって川へ離す事業をやっている。二人はそこの漁師の連中でした。そして川口に引っ張り出されてみると、川向かいに来てるのは警察官だった。そうしたら、「なんだ、そっちはじいさんだべ」と警察官が言うのに、「はいそうです」と私達を捕まえたやつが言う。「一人は孫らしいですね」。「まだ子供だわ。おまえ学校行ってるのか」と私はチビだったから就学前に見られる。「どうします旦那、こいつら連れて行きますか」と私達を捕まえたやつが言うと、「かわいそうに、そんなもん勘弁してやれ。その代わり網と捕まえた魚は押収しろ。そしてじいさんもう二度と来るなよ。まして孫連れて。孫は学校行ってるんだろ」と警察官が言ったら、エカシが「ハイ」と言った。「子供の教育に悪い。今日は勘弁してやるから」と警察官は言って帰った。

それから、網も魚も取られて、私達は十勝川の河原から堤防へ上がって堤防づたいに私達の家に帰りながら、「エカシ、網もったいなかったなぁ」と私が言った。そうしたら「いやぁ今だから網を取られるだけですむんだ。昔な、エカシのまだ若い頃は鮭を捕って鉄砲で殺されたんだ」と言うわけさ。私はその時それを信じられなかった。おそらく威嚇のために一発放ったんだろうくらいにしか思ってなかった。それは私が小学校3年生くらいの時だから、10かそこらでしょうね。それがずーっと心には引っかかっていたんですよ。

そして私が十勝の歴史、アイヌの歴史を調べてみようと思ったのは、50歳くらいの頃からです。今から20年くらい前からなんだけれど、いろいろな資料をあさっていくうちに、渡辺勝日誌という手記の原本が手に入った。みたらその中にその殺傷事件が載っている。あらぁと思って、これを調べてもらったら、その孫で、渡辺洪という方、

新十勝新聞社の編集局長もやった方なんだけど、その人がその祖父の日誌を本にしたわけ。その中にこういうふうに書いてある。アイヌは十勝川で明治16年に初めて鮭の捕獲禁止令が出されて、アイヌ達は食うのにも困った。その中に渡辺洪のおばあさんの回顧談として、この時にアイヌ数名は殺された。うちの夫勝は、監視所へ駆け込んで、人間の命が大事なのか、それとも鮭の命が大事なのかと抗議した。それで、ホッチャレ、いわゆる産卵終わって流れる魚だけは捕るのは許すという許可をもらったという話が書かれていたのです。

十勝には1市3村16町の20の自治体があるんですが、中札内村の先生が私のところに、アイヌのことを教えて欲しいということで来ることになった。私のところへは、いろいろな方が来るんですよ。だいたい夏休みに入ると大学生なんかが来る。「なんだ卒論か？」と言うと、「ハイそうです」と大学生が言うから、「そうだよな、アイヌの事を書けば、その審査する先生もわからないんだから、みんな通っていくわな」と私もからかったりするんだけどね。それで、中札内の先生との話で、「中札内にもアイヌが住んでたんですよね」と聞くから、「そうだよ」と言ったら、「少しうちの子供達にもアイヌのことを教えたいんだ」と先生は言う。「それで笹村さん、いろんな事教えてくれないか」ともちかけられたから、「本当に先生やる気あるの」と聞いたら、「ハイ」と言うから、私が作ってあった例の殺傷事件の資料を見せて、よかったらコピー取っていきなと言ったの。それからその先生は、ちゃんと資料をまとめて本に載せていました。

質　問：依田勉三の晩成社の入植を帯広は開基の年としたようですが、開基という言葉に関して問題はなかったのですか？

笹　村：だいたい開基という言葉は、人が住んだ時を開基とすべきなのが当然だけれども、依田勉三が入ったときが初めて帯広に和人が入ったときなので、帯広市から、それを開基にしたいなという意向の打診がありました。私達もそれに全く依存ありません。依田勉三が実際この十勝に入ったのは、無断でなく、ある程度の許可をいただいて入っている人だから、それを開拓の始めとして結構でしょうと申し上げました。

それは、帯広市の開基だから構わないと思っていますが、十勝の開基ということになってきたら大変です。おそらく広尾あたりがそうだったかもしれません。去年、隣の音更町で開基百年祭をやったのですが、それもやはり、開拓民が入った年を開基としたいということで、地域のアイヌの人達は納得したのではないでしょうか。

帯広市の百年の時の開基も、百年を記念して百年記念館というものを帯広市で作ったんです。その時も、もちろん私達の方に市の方からどうでしょうかというお話がありました。それで私達は、依存はありませんということでお答えしました。

ということで、明治16年を開基の年として、そして来年が120周年になるわけです。市の企画でいろいろなイベントを予定しています。帯広には無形文化財に指定されたカムイトウウポポというアイヌ古式舞踊の保存会もあるし、それからアイヌ語教室もやっていますから、私達もそれに伴っていろいろなイベントに参加させてもらおうと思っています。

アイヌ関連総合研究助成事業

十勝開拓とアイヌ歴史検証報告書

事業実施期間「平成13年4月1日～平成14年2月28日」

十勝開拓とアイヌ歴史研究会